
廻る季節に目を閉じて

愛椎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廻る季節に目を閉じて

【Nコード】

N9906H

【作者名】

愛椎

【あらすじ】

＜明美と出会って5年、明美がいなくなつて2年。彼女がいた季節はあまりにも明るすぎて鮮やかすぎて、目を閉じる度、季節が移ろう度、鮮明に思い出す。できることならもう一度、あの頃に戻りたい…。＞ケ。○イシさんの歌に合わせた主に赤井（諸星）視点で描く、二人の思い出の物語。

夏：また君に会える

青い海と空。白い雲と砂浜。

少し痛いくらいに照りつける太陽が眩しくって、眩しくって。

でも私の心が躍るのはそれだけが理由じゃない…。

「明美、あんまりはしゃぐな。転ぶぞ」

「もう、私そんなにドジじゃないわ。大丈夫！大君も早くこっち来てよ！」

そう言う私に少し遠くから彼が微かに笑みを漏らした。

黒のニット帽がトレードマークで、いつも黒の服ばかり着ている彼に今日は無理やり白いシャツを着せた。

「白…か…。俺は…白は着れないよ」

と、ブツブツ文句を言っていたけど。

「今年こそは海に行こう！」

とまだ桜咲ききらない頃から明美は俺に訴えてきた。

去年は仕事続きで、海どころか花火や祭りにも連れていけなかった。

「仕方ないじゃない、お仕事だもん」

明美はそう明るく言いながらも、頬を膨らましていた。

そんなわけで、今年は明美の訴えを聞き入れ1泊2日で海へとやってきた。

海はそんなに好きじゃなかった。というより夏が好きではなかった。暗闇で生きる者として、夏の日差しは明るく眩しすぎた。

季節問わず、蒸し暑い日本の夏の間も黒い服ばかり着ているせいで、明美に暑苦しいと散々言われた。

「夏なんだからもっと爽やかな服着ましょう」
そう言って今日買ってきたという白いシャツを押付けてきた。

白いシャツに袖を通し、鏡の前に立つと、ゾツとするほど似合っていない気がしてならなかった。

純粹で汚れない白は、嘘で塗り固められ明美を騙し続ける汚れた自分には似合わない。

それに比べ、目の前に広がる海にはしゃぎまくる明美は薄手の白いワンピースがよく似合っていた。

「えへへ。大君とおそろいで白い服にしちゃった。たまにはいいわよね」

いつものように明美の家まで車で迎えに行くと、爽やかすぎる白のワンピースを着た彼女が現れそう言った。

よっぽど楽しみだったのか、明美は助手席でくると表情を変えながら、

これから行く海のこととか、いつものように妹と昔、海に行った思い出話とかを途切れなく喋り続けていた。

「そんな勢いで喋っていたら海に着く前に疲れてしまうぞ」

大君はハンドルを握りながら少し呆れて言った。

それでもはやる気持ちを抑えられず、喋り続けていたら、先程と同じことを言っても無駄だと思ったのか、赤信号で止まった瞬間、

「明美…」

と少し艶っぽく囁かれ、

「えっ？」

少し驚いて大君のほうに顔を向けると、飲んでいたブラックコーヒーの味のする唇で口を塞がれてしまった。

「こうすれば少し、落ち着いて喋れるか？」

シニカルに笑いながら大君は言った。

落ち着くどころかますます心は弾んでしまつて、海岸に着いた途端に走り出してしまった。

大君はゆっくり車を降りて、静かにはしゃぐ私に近づいてきた。

心地よい潮風に彼の黒くて長い髪と私が選んだ白いシャツが流れて……ちよつとドキドキしてしまう。

暑い日差しに加えて、いつもと違う雰囲気の大君のせいでどんどん身体が熱くなつていくのがわかる。

少しでも冷まそうと海に足を入れたとき、ようやく大君が私に追いついた。

「おいおい、せっかくの服が濡れるぞ」

「大丈夫よ！」

そう言つてワンピースの前ボタンを全て外してガバッと子どものよ

うに前を開けて見せた。

そう、実は大君に内緒でこの旅行のために買った水着を着てきたのだ。

いつもクールで無表情の大君が驚く顔が見たくって。

大君は驚くどころかかなり慌てた様子で、

「おまつ、何して…」

「じゃーん！大君を驚かそうと思って。どう？似合う？」

そんな大君を見るのは初めてで、嬉しくなってしまう、ちょっと大胆になってみた。

薄いピンク地に大きな花柄がついたホルターネックのビキニ。

本当はものすごく恥ずかしかったけど、

「これでいつもポーカーフェイスの彼を驚かせてあげなさいよ」と志保が選んでくれたもの。

視線をそらしたまま一向に何も言う気配のない大君に、徐々に不安になってきた…

静かに大君に近づくと、いつもの無表情ながらも少しだけ戸惑いの表情を見せチラッと一瞬だけ私の方を向いた。

夏の日差しよりも、もっともつと眩しすぎる明美の白い肌が突然、露になり、とてもじゃないけど正面から見る事ができなかった。ポーカーフェイスはお手の物。この嘘だらけの諸星大という自分も完璧に作り上げ演じてきたが、この時ばかりは少しも役に立たなかった。

自分の顔が少しだらしく崩れるのと、熱が帯びていくのがはつきりとわかった。

おそらくそれは照りつける太陽のせいだけではなく…。

チラッと一瞬明美を見やると、

「ねーえ…？大…君…？だーいーくーんー？」

とさっきから上目遣いに応答を求めてくる明美をどうしようか、何か反応をしてやるか、ひとまず服を着せるか、考え…

ちゅっ

と遠慮がちに音を立てて明美は頬にキスをしてきた。

情けないことにまたしても明美の突発的行動により、ポーカーフエイスは崩された。

(…ったく何をやってるんだ俺は。)

自嘲気味に笑った後、キスをして猛スピードで水着のまま海へ駆け出していった明美をゆっくりと追いかける。

静かに心の中で認めたくない、決して言えない先ほど明美が求めた応答を発しながら…

(「…。」)

砂浜からこちらへ向かう大君は少し笑っているように見えた。

(作戦は少しは成功したかしら…？)

なんて思うと、自然と笑みがこぼれる。

白いシャツのまま海へと入ってきた大君はそのまま私をすっぽりと腕の中に収め、

「…明美、頼むから服をきてくれ」
そう小さく頭の上で囁いた。

どうしようもなく不器用に聞こえたその優しい言葉にまた嬉しくなった私は、もう少しだけ大胆に…

「……してくれたらね」

「何を？」

「キス」

たどりつけないくらい深い大君の瞳を真っ直ぐに見つめながら言う。
大君は少し不貞腐れた表情をして

「…言われなくともするつもりだった」

「バカ…」

そう言ってゆつくりと大君は左手を私の右手に絡めてきた。

あと何度、君と夏を過ごせるだろうか。

飲み込んだ言葉を躊躇することなく、君に言える夏はくるだろうか。

波音だけが聞こえる、灼熱の太陽の下、

どこまでも続く水平線のように、二人でこのままずっと永遠にいら

れたら…

どうか…

また君に会える

季節の訪れがくるように…。

そう願って、眩しい君にキスをした。

夏：また君に会える（後書き）

はじめまして、愛椎です。

いつの間にかハマってしまった秀×明カップル。二人の切なすぎる関係が大好きです。

物語のタイトルは全てケ。○イシさんの歌から拝借。内容も歌詞に添って作ったつもりです。

大元の二人とは違う印象を受ける部分が多々あるかと思いますが（特に赤井（諸星））あくまでも私の想像なのでご了承を。

なぜか夏からのスタートですが、次も頑張ります。

誤字脱字、作品感想、何でも結構です！ご意見いただければ幸いです。

秋：恋の終わりは意外と静かに

君が去ってから、早2年余り。

こんな日が来ることはわかっていたのに。

君はもういない。二度と戻れない。

恋の終わりは意外と静かに

大君の部屋は生活感ゼロだった。

初めて大君の部屋へ行ったのは夏が終わって、緑が徐々に色を変え始めた頃。

その時「本当にここで生活しているの？」と思わず聞いてしまうほどだった。

「ソファも無い。TVも無い。おまけにお鍋やお皿まで無いなんて……」

思わず、ハァとため息をついてしまった。

「これじゃご飯も食べられないじゃない！」

「……家では飯など作らないし、食べない。コーヒーさえ飲めればいい」

そう真顔で答えた大君にますます呆れてしまって。

家に着いて早々、私は大君の手を引き玄関へ向かった。

「おい、どこ行くつもりだ？」

「決まってるでしょ？ 買い物よ」

そう言いながらずんと玄関へ進んでいく。

が、グンつと突然腕が引つ張られ、前進できなくなった。

「必要ない」

「あるの！」

「なぜだ？」

相変わらず無愛想な顔でそう言う大君に呆れと苛立ちが混ざって、だんだんと悲しくなってきた。

「…だって、今度からは私もこの家に入りするじゃない？ 大君にご飯とか作って待ってようと思ったのに」

と、ちよつと半べそをかきながら、私は先程大君がくれた合鍵をてのひらに乗せて見せた。

すると大君は静かに

「フッ…」

と無愛想な表情の影から笑って、俯く私の額にキスをして顔を上げるよう促した。

「そんなに大事か、その鍵？」

不意打ちの優しいキスに、怒っていたはずが嬉しさの方が勝ってしまい、くやしくて

「そうよ」

と不器用に答えた。

明美好みのベージュのソファに腰をかけながら、アルファベットが所狭しと並ぶ書類に目を通し、冷めたコーヒーを飲みきってからタバコに火をつける。

立ち上がってベランダに出た。

少し肌寒い風がタバコの煙をゆらす。

（もう、秋か…）

アメリカにいた頃は季節なんか気にしたことは無かった。

日本のように目に鮮やかに季節は移ろいだりしないし、そもそもそんなことに意識を向けたことがなかった。

そんな自分が「もう、秋か…」などと思うようになったのは間違いなく彼女に出逢ってからだろう。

あの日、暗闇だった自分の世界に明美が現れたときから光に満ち溢れていたのに、今はまたぽっかりと空いた穴から光が抜け落ち、暗闇に戻ってしまった。

それはあまりにもあっけなく、静かに… たった一発の乾いた音で。

彼女のことを思い出すと心臓の奥を抉られるような痛みを感じる。感傷的になる自分は嫌だった。

気を取り直すためコーヒーを淹れなおそうと思い、ゆらゆらと煙が昇るタバコを左手で灰皿に置いてから、ソファを通り越しキッチンへと向かう。

「大君、私が淹れるよ」

（…っっ…）

思わず、ソファの方に振り返る。

しかしそこにはもちろん誰も居るわけが無く…ただ寂しげな秋の陽だけが射している。

(…今、声が…聞こえた気が…)

(…フンツ。何をバカなことを考えているんだ俺は)

明美はとうにいない。

それはわかりきっていた結末。

それでも今も声を聴きたいと、会いたいと、抱きしめたいと、そして一番大切なことを伝えたいと思ってしまう自分がいる。

どんなにその想いを繋ぎ合わせても、今彼女がいる世界には決して届かないのに。

キッチンの戸棚から新しいコーヒーマグを取り出そうと扉を開くと、そこには生活用品を買い揃えに行ったあの日に買った2人分の箸が仲良く並んでいた。

寄り添う2膳の箸のように、あのソファでいつも明美と並んで腰掛けていたな…とソファの方へ目を向けた。

穏やかな休日に2人ソファに座ってコーヒを飲みながら本を読み、たまに気まぐれに明美は俺に抱きついてきて、俺は明美にキスを落とす。

そんなありふれた恋人としての時間は、あのときたとえ偽りの時を刻んでいても、今でも確かにその秒針の心地よい音が残っている。

「これで大分、人が住んでいる家らしくなったわね！」

買い物を終えて、全ての荷物が部屋の適切な位置に置かれたのを眺めて、満足する。

何を買うにしても、

「大君はどれがいいと思う?」

と聞いても

「それでいいんじゃないか」

「どれでもいい」

という答えばかりで、結局ほとんどのものが自分好みのものになってしまった。

（でも、今度からはここで毎日、大君を待っていてもいいんだもんね。）

大君に美味しいもの作って、2人で食事をして、ソファに座って映画みて、本読んで、お喋りして、それから…

（えへへ…）

などというんな事をする姿を思い浮かべていると、思わず、にやけてしまう。

そして、スカートのポケットに入った先程大君にもらった温かい金属をもう一度しっかりと握りしめる。

「何をにやついているんだ?」

と大君は私の後ろからそつと腕を前に回しながら言う。

「なつ、なつ、なんでもないよ」

甘い想像していることを気付かしてしまったのかと思い、思わず声が上がらず、体中に熱が広がる。

「ホォー…、てつきりあのソファでこうしている姿でも想像していたのかと思ったよ」

大君は耳元で甘く囁きながら、手前に回していた両手に力を込めてさらに身体を密着させ、軽く熱を持った頬にキスをした。

「ひゃっ！」

いつもより甘い大君の声と突然のキスにドキドキしてしまい、自分でもはつきりとわかるほどに頬が朱色に染まる。

大君はククツと笑った後、

「ならば、ご想像通りに…」

（えっ…！？）

と思った時には既に、足が宙に浮いており、ポスツツとソファアの上に降ろされた。

夏の終わりを告げる、枯れ色の陽が射す部屋、買ったばかりのソファアの上で明美を抱いた。

途中、「待ってるから、絶対この部屋に帰ってきてね」と彼女はかすめるような声で言った。

泣いているのかと思い、彼女の顔を見ようとしたが、強い西日でその表情は逆光でわからなかった。

あの時、狭いと感じたソファアは今、とても広く感じる。

ぽっかりと隣に空いた一人分のスペースは二度と埋まることはない。

危険を承知で合鍵を渡したのは、寂しい想いばかりしている彼女に気を使う優しい彼氏を演じたからではない。

この身が危うくなるうとも、その先に終わりが見えていても、彼女に辛い想いをさせても、ただ…彼女と繋がっていたかったんだ…

「もう、初日からこんなだったら、先が思いやられるわ。毎回こんなことばかりしたら、二度と来ないからね！」

射しこんでいた陽が完全に落ちきるまで明美の温もりを感じ、ようやく彼女を開放すると頬を膨らましながらそう言って、

「…なんてね」

と付け加え、茶目つ気たつぷりに笑った。

そつと彼女が座っていた場所を撫でる。微笑む彼女の頭を優しく撫でていたように。ひんやりと冷たいそこは、明美がもういない事実を冷酷に突きつける。

しかし何度季節を廻っても、たとえこの冷酷な事実を突きつけられようとも、明美が自分を呼ぶ愛しい響きが、面影がこの部屋から消えることはない。

潜入捜査の失敗後、組織に目を付けられていて危険だと、すぐに引き払うよう命じられたこの部屋。

それにも関わらず、命令に従うことはできなかった。

明美の思い出ばかりが散乱したこの部屋に、解決策も無く、何処にこの想いを届けていいかわからず、居座ることしかできないから。

これからますます秋が深まり、寒さが厳しくなっていくのに…

明美の温度が無い部屋は余計に寒く感じるだろう。

秋：恋の終わりは意外と静かに（後書き）

順調に更新完了しました！

この歌は”秋の歌”というわけではないので、秋の話にするには若干、無理がある部分もあったのですが、秋って意味も無く寂しい気持ちになったりするよなぁと思って、この歌で書かせてもらいました。

またご意見いただけたら嬉しいです。

冬：冬物語（前書き）

15禁程度のラブシーンが含まれます。「そんな秀×明は想像したくない」という方、お戻りすることをお勧めします。

冬：冬物語

車にキーを挿し、エンジンをかける。
ハンドルを握る手がわずかに震える。

（―今日は一段と冷えるな…）

先程、ジヨデイが「今日は雪が降るみたいよ」と言っていたことを
思い出す。

ハア―っと両手に白い息をかけ、もう一度ハンドルを握り直し、車
を発進させた。

車の停めてあった地下駐車場から外に出ると、暗い夜空が果てしな
く、深く続いていた。

暗い夜空でいつもより明るく見える星の下、久々に自宅へと車を走
らせた。

ほとんど帰ることの無い自宅と呼べない自宅は、5年前にある仕事
のために日本へやってきた時に借りたマンション。

全てが嘘で埋め尽くされたこの家へは何度か彼女も訪れた。
温かい料理を作り、部屋を暖め、

「大君、おかえり」と出迎えてくれた。

でも、もうそんな家には二度と帰れない。

車をマンションの駐車場に停め、車を降りた。
ふと、こぼれるように果てない闇から白い雪が落ちてきた。
こんな雪の降る寒い夜は、彼女の温もりをさがし、過去に逃げてしまふ。

いつかは忘れられるだろうか？
雪で飾られた彼女との冬物語を。

『明日は雪が降るみたいよ。きっと冷え込むからクリームシチュー
作ろうと思うの！』

「ああ、できるだけ早く帰るようにする。遅くなりそうだったら連絡するから、待っていないで帰るんだぞ」

『わかってるわ』

彼女は雪が降ることに少し興奮したように、いつもより弾んだ声で電話を切った。

「早く帰る」と言いながら、結局いつも遅くなってしまう。
それでも彼女は、合鍵を使って家に入り、温かい料理を残していつてくれる。

「本当は『おかえり』って出迎えて、一緒にご飯、食べられたらいい

いんだけど…」

と彼女は電話口で毎度つぶやく。

「だって、『おかえり』って出迎えてくれる人がいることと、一緒にごはんを食べてくれる人がいることは、最高の幸福シアワセよ」

嘘を積み重ね、彼女を騙している身分の自分には、どちらももったいすぎる幸福シアワセだ。

早く帰れないどころか、ここ最近は休みも全く取れず、なんだかんだで彼女と1ヶ月近く会っていなかった。

（今までは最低でも1週間に1回くらいはわずかであっても顔を合わせていたのに…）

それだけ、任務が過度期を迎えているということである。と同時に彼女との別れの時も迫ってきているということでもあるのだ。

いつその会えない日々が続いたまま、いわゆる自然消滅でこの偽りの恋愛を終わらせることができたのならどんなにいいだろうか。雪が手のひらの上で静かに溶けていくように。

そうすればなによりも彼女を傷つけなくて済む。そして…自分も…

例の通り今日も仕事は遅くなり、仕事場を出るときにはまだチラつく程度の雪だったのが、自宅マンションにたどりついた時には大雪になっていた。

冷たいドアノブを回し、玄関で雪をほろろ。すると、夕方彼女が作ったと思われるシチューの匂いが玄関まで伝わってきた。

「大君、身体壊さないといいんだけど」

「大丈夫かしら…」

なんてこんな自分の心配ばかり口にしながらシチューの鍋をかき回す彼女の姿を思い浮かべ、先程まで完璧なるポーカーフェイスだった自分の顔がにわかに緩むのがわかった。

フツと思わず笑みをもらし、リビングへ向かう…

(…何かがおかしい。)

鼻をくすぐるシチューの匂いを乗せた空気がやけに暑い。

(―暖房が入りっぱなし?)

そしてある予感を抱いて、リビングのドアを開けた。

予感は的中した。

そこには窓際で月明かりを浴びながら雪の落ちる外を眺める彼女がいた。

「…明美」

「おかえりなさい、大君」

月明かりで半分しか見えない彼女の顔は笑っていた。

笑って「おかえり」と迎えてくれる彼女が好きだった。

初めは毎度毎度、それを言うためだけにわざわざ玄関に出てくるなんて、バカらしいと思っていた。

しかし気が付けば、いつの間にか当たり前に彼女の「おかえり」を待ち望むようになり、今ではその最高の幸福シアワセを求めて、彼女の待つこの家に帰っていた。だから仕事が遅くなって、彼女の「おかえり」が玄関の戸を開けても無いことがわかつている日は、自分でも驚くほど落胆していた。

今日もついさつきリビングの戸を開けるまでは暗い闇夜の中にいたのに、突然白く輝く雪が目の前に降ってきたのだ。

雪を目の前にした自分の中に、嘘だ、偽りだ、演技だ、とありとあらゆる言葉で言い聞かせても抑えることのできない欲求や衝動がこみ上げてくるのが、はっきりとわかる。

今、この欲求や衝動のままに動けば、間違いなく彼女を手放すことが出来なくなる。だからこそ冷たく言い放つしか術を知らない。彼女も自分も傷つけることなく離れていくための。

「お前、なぜまだ居る？『遅くなるから、帰れ』と言ったはずだ」

「…っ。ごめんなさい。帰ろうと思ったの。でも、ちょうど雪が降ってきて止みそうだったから少し待ってから帰ろうと思ったら、どんどん降ってきちゃって…それで…」

暗がり目に見えた彼女のもう半分の顔は確かに泣いていた。

その表情を見た途端、胸が刺されるような気持ちになった。

冷たくしても、愛しても、彼女は半分だけ笑って、半分だけ泣くのだろう。どうすれば、彼女が泣かずにすむだろうか。

どんなにキレル頭でもこの答えは未だ出ない。

「…ほら、車で送るから、帰るんだ」

そう言いながら彼女の腕を引いた。キレル頭が出した今、最良の答えは前者だった。

ただ、既に欲しかった彼女の「おかえり」を手にしてしまっており、その頭はFBIの任務のための偽りの恋人、諸星大ではなく、傷つ

け苦しめるとわかりながらも本能のままに宮野明美を求める赤井秀一へと切り替るギリギリのところまできていた。早く、彼女をこの家から出さなければ、赤井秀一の頭はおそらく後者の答えを出す…。

「明美、ほら」

「……………」

俯いたまま、一步も動こうとはしない彼女に、今度はなだめるように言う。

「明日も学校あるんだろう？ゼミの発表も近いと言っていたじゃないか…」

そう言うのと、彼女は俯きながら腕を掴んでいた俺の左手を外し、両手でその左手を包み込んだ。

「大君の手、冷たいわ…」

「……………」

雪のように白い彼女の両手は温かった。

そんな両手に黒に染まった冷たい左手を握らせなくなかった。

—これ以上、彼女を汚してはならない。

そう思っただけの両手を外そうとした。すると彼女は自ら両手を外し、その両手を背中に回してきつく抱きしめてきた。

「ずっと会いたくて…せつかく、ようやく大君に会えたんだもん。もう少し一緒にいたい…。帰りたい…。ないの」

未だ表情の見えない彼女から発せられた言葉に、諸星大が赤井秀一へと切り替わる感覚が電光石火のごとく身体を走った。

「…お前、本気で言ってるのか？」

そう静かに問うた途端、彼女の温もりが離れた。

「なーんてね。ちよつとワガママ言っただ君を困らせてみたの。こ

めんね。でも会いたかったのは本当よ。…帰るわ。車で送って」
ようやく見ることでできた彼女の表情は相変わらず半分だけ泣いていて、でも彼女は笑ってそう言った。

「ね、大君…怒ってる？」

せつかく手に入れた温もりが離れたことに、偽りの自分にそんな笑顔を向けられることに、赤井秀一は苛立ちを覚え、嫉妬し、理性はもうどこにもなかった。

今度は自分が彼女の背中に手を回し、胸の中に再び温もりを取り戻す。

「きゃっ…！ちよっ…と、大…君…？」

突然の予想外の出来事に、慌てふためく小さな彼女の柔らかな髪にキスを一つ落とし、汚れた両手で極力優しく頬を包み、不安でいっぱいになった瞳を覗きながら、そつと告げた。

「…今日は帰さない」

これが最良最悪の答え。

仕事だ。これも仕事だ。完璧なまでに彼女の恋人を演じきる。

彼女が辛いときは抱きしめてあげなくてはいけないし、頭をなでてやらなくてはいけなし、キスを落としてやらなくてはいけない。

彼女は騙されているとも知らず、それに純粹に応え、抱きしめ、キスを返し、愛をささやいてくれる。

そうだったはずなのに…

雪はサラサラとした粉雪に変わっていた。

月と雪で普段よりも明るい夜の光はブラインドの隙間を縫って、彼女の白い肌をより一層白く輝かせた。
本当の雪原のようだった。

全身にキスを落とし、雪原に季節外れの赤い花を咲かす。

「明美…すまない」

「……？」

なぜ謝られたのかわからない、といった表情で彼女は首を傾げた。

「…いや、なんでもない」

そう言いながら額に軽く口付ける。

すると彼女は微笑んで、

「大君の髪、くすぐったいわ」

とクスクスと笑いながら、ちょうど彼女の肩にかかる黒く長い髪を白くて繊細な指ですくいあげ、耳に掛け、そのまま抱きつくように唇を重ねてきた。

この時の彼女の表情は少しも泣いていなかった。本当はこんなにも簡単に彼女を泣かせることなく愛してやれるのに…。

そう心で思いながら、彼女の唇が真っ赤になるまでキスを続けた。

長いキスの後、互いの名を囁きあった。

「明美…」

「大…君…」

（「……愛してる」）

決して云えないありつただけの愛を込めて。

雪は一晩中降り続け、雪の積もった地面が朝の日に照らされるまで、何度も重なり、絡まりあつた。その間、一度も任務のことも組織のことも思い出すことはなかった。

ようやく白いシートに2人で包まれた時、彼女が言った。

「離さないでね…」

途端、偽りの現実に取り戻され、それに言葉で応答することは出来なかった。代わりにグツと彼女の細い身体を抱き寄せた。彼女の温もりが身体全体に伝わる。この温もりを離したくない…。

そうして2人で静かに瞳を閉じた。

眼を開けると等に太陽は高いところにあつた。陽が照っているにも関わらず、寒気を感じた。

今、白いシートに包まれているのは自分ひとりだけ。温もりはもう、そこにあるわけがないことを思い出す。

心も身体も雪のように白かった彼女を汚し、溶かしてしまったのは…間違いなく…

冬：冬物語（後書き）

この歌は特に好きな歌です。個人的に赤井がこの歌の歌詞のような気持ちでいて欲しいなあ〜と思っています。

今まで1番工口の度合いが強くなった気がします。（笑）でも、二人は大人なので、アリでしょう！（笑）

また、ご意見いただけたら嬉しいです。

春：さくら（前書き）

15禁程度のラブシーンが含まれます。「そんな秀×明は想像したくない!」という方、お戻りすることをお勧めします。

春：さくら

「いやぁー！風強いー！」

突如、吹き抜けた強い風に桜の木はごうごうと音を立ててなびき、溜め込んだピンク色の花びらがシャワーのように降り注いだ。

ピンク色のシャワーを浴びながら明美は叫んだ。

「もう、今日は冬に逆戻りしたような天気ね。せっかく暖かくなつたと思つたのに」

風に舞うダークブラウンの髪をかき分けて、どんよりとした曇り空を仰ぎ、呟く。

俺はその様子を少し離れた所から眺める。

桜の花びらをあちこちにつけて跳ね回る明美は桜の花の精か何かのように見え、思わず笑みがこぼれそうになる。

こんな余りにも普通の恋人同士のような時間は、いつの間にか凍ってしまっていた心を溶かし、この桜咲く春のように優しい光と温もりを与えてくれる。

本当は彼女がどこにもいかないように、自分だけのものであるように、離したくなかった。

優しい光と温もりを与えてくれた彼女を。

花の精は今、どこにいるだろう？

この季節、この桜の木の下へ来れば、ピンク色の花びらと共に舞い落ちてくるような気がしてならない。

さくら

「だーいーくーん！」

そう呼びながら少し先を歩いていたはずの明美が走ってこちらへ向かってきた。

そしてそのまま、自分の胸のなかへと飛び込んできた。ふわっと一瞬香るのは桜の花の匂いではなく、彼女のものだ。

「…ん？どうした？」

「うふふ。あったかい」

一瞬だけ顔を上げてそう言つと、再び胸の中に顔を埋め、ぎゅっと抱きついていた。

桜の花の精は抱擁をやめようとはせず、しばらくそのままだった。

風のざわめく音と桜の花がこすれあう音だけが鳴り響き、腕の中に壊れてしまいそうなくらい柔らかで繊細なぬくもりを抱く。

「幸せ」というものがどういったものか、今まではよくわからなかった。しかし、おそらくこれが「幸せ」というものなのかもしれない…。

彼女を抱きしめ返そうと思った瞬間、彼女は花びらが舞うようにするりと腕から抜けて、また駆け出して行った。
思わずハツとして、少し慌てて彼女を呼び止める。

「明美！」

「なあーに？」

すぐに声が聞こえて、まだ彼女が此処にいとわかり安堵する。

「…また、転ぶぞ」

「『また』ってどういうこと？まるでいつも転んでるみたいじゃない！」

「いつも転んでいるだろう」

「ふんっ！」

と彼女は桜の花びらを頭に乘せたまま、いつもの不貞腐れた顔をする。

ご機嫌損ねた桜の花の精があまりにも愛らしくて、ついにクスリと笑いが漏れてしまう。

ますます明美は面白くなさそうな顔して、少し先からこっちを見ている。そんな彼女にゆっくりと近づいて左手を差し伸べる。

「転ばない良い方法だと思うんだが…」

彼女はまだ頬を膨らませているから、

「…嫌ならいいんだ」

そう言つて手を引くと、今度は彼女がクスリと笑って左腕にしがみついてきた。

桜並木の小道を腕を組みながら歩く、幸せそうな恋人同士。

いったい誰が自分達二人を巨大な犯罪組織の一員とそこに潜入捜査しているFBIの人間で、これが偽りの関係だと思うだろうか。

「なんか結婚式みたいね」

ふと彼女がそんなことを言った。

「桜の花が舞ってるのがフラワーシャワーみたい」

嬉しそうに言う彼女の顔を覗くと、今まで見たことのない苦しそうな表情をしていた。

その表情を見てしまった時、いよいよ偽りの恋物語が結末を迎えようとしているような気がした。

返す言葉を迷っていると、

「何、困った顔してるの？大君？別に『私を大君のお嫁さんにして』なんて言ってないわよ」

苦しそうな表情が消え、笑顔で彼女はそう言った。

その言葉は有難くも、切なくも、愛おしくも、苦しくもあって、こらえきれない本音が漏れてしまいそうになる。

言葉にしてしまえば簡単に彼女を幸せにも不幸にも陥れてしまうだろうから、今出来る精一杯の本音を伝える。

「明美…」

彼女の名を呼び、愛を誓うかのようにキスをする。

…が、唇を離れた瞬間、さっきするりと腕から抜けていつてしまったように、また彼女がいなくなってしまう気がして離すことが出来ず、むしろもっと深く求めるようなキスになる。

「…っつ、んんっ…」

彼女が苦しそうな声をあげたのが聞こえ、慌てて唇を離す。

すると彼女は瞳に涙を溜めながら愛おしげに自分の偽りの名を呼ぶ。

「…大君」

「誰も『お前を俺のお嫁さんにしない』と言っていないが…」

彼女に少しでも不安を取り除いて欲しくて、極力顔の力を緩めて、優しく答えた。

しかし、彼女は静かに笑って、

「神様の前で誓えないことは言っちゃだめよ」

と終わりへの宣告を下した。

嘘ではない。たとえこの関係が嘘であっても間違いなく彼女を想う気持ちは神に誓って本当だ。

わかっていたのに。最初から地獄へ落ちるとわかっていたのに、それでも尚、地獄への道を辿り続ける。

神は自分たちを祝福はしてくれないのだろうか。

始まってしまったこの関係を、前にも後ろにも進めることもできないければ、左右に進路を変えることもできない。どうすることもできない自分が殺したい程憎かった。

彼女の下した宣告は正しいのに、そんな宣告をされることすら苛立ちに変わり、思わず乱暴に彼女の両腕を掴んで引き寄せる。ほとんどペースを乱すことの無い自分の乱暴な行動に驚いたのか、彼女は困った顔をしたが、構うことなく続けて乱暴にキスをした。

「…んっ」

「ちよっ…」

「ね…」

「だ…くん…」

深くて長いキスを強制し、ようやく彼女を解放すると、彼女は白い手を自分の頬に差し伸べて

「どうしたの？大君…今日は変よ？」

彼女に名前を呼ばれて、ようやく落ち着きを取り戻す。

「悪い…」

それ以上の言葉が浮かばなく、顔をそらす。

「汝、諸星大は今の想いに嘘がない事を誓いますか？」

サア…と桜並木を風が抜ける。

彼女はまるで自分の心を読んだかのように、真っ直ぐにこっちを見て、そんな言葉をはっした。

「明美…」

「誓うの？誓わないの？どっち？」

両手を腰に当てて、いつもの不貞腐れた顔をする。

返答ができない。

「また、そんな顔してる…」

彼女は苦笑しながらそつと顔を近づけ、

「次に桜が咲くときに、答えることを誓います」

そう言つて、静かに腕を首に回して誓いのキスをした。

花の精からのキスは神の祝福とも思えるくらい優しくて温かかった。今度こそ腕からすり抜けないようにしっかりと彼女を抱きしめ返し、柔らかなダークブラウンの髪を撫でる。

来た道を手を繋いで戻る間、言葉は無かった。
この道がとつくの前から天国へとは向かっていなかったことをおそろく明美は気付いてしまったのかもしれない。

「さっきの…絶対、約束よ？」

狭いシボレーの後部座席で苦しげな声で彼女は言った。

彼女の胸に桜の花びらのような痕を付けている自分が一向に顔を上げる気配が無いのを見て、「ねえ？」ともう一度問いかけながら、彼女は頭を優しく撫でてきた。

この約束には何が何でも答えたかった。次に桜が咲くまでには必ず組織を潰して、

彼女に本当の名前、本当の想いを告げたい。

ようやく顔を上げ、彼女の方を見やる。

「ああ…もちろん」

「誓いのキスは…？」

彼女はイタズラな表情を見せて、キスをねだった。

—チュッ

と一つ小さなキスを落とすと彼女は今日一番の笑みを見せた。

「お前、今日桜の花びらをずっと頭に乘つけてた」

柔らかな髪の中にまだ紛れ込んでいた、桜の花びらを取り、彼女の目の前にかざした。

「うそー！何で言ってくれなかったのー？」

「…いや、桜の花の精みたいで…」

と思わずつぶやくと彼女はしつかりと聞いていたらしく、プツと噴出してから、

「そんなこと言うなんて、やっぱり今日の大君、変よ」

なんて言いだした。

「おい…」

「そして、桜の木の下で桜の精にこんなことして、バチ当たるよ、大君」

彼女はコツンと額を小突いてきた。

車に戻った後、人気の無い桜の木の下に車を止め直し、自分でも鬼畜とは思えないくらいに、嫌がる彼女を無理やり後部座席に追いやり、交わった。

このどうしようもない愛おしさを、今すぐに伝えたかった。そして、一番大切なことを言うことの出来ない自分はこうすることでしか伝えられなかった。

そんな自分がむなしく感じたが、それでも止められずに再び硬い車のシートに二人沈んだ。

気を失っている彼女の額にキスをして、言えなかった言葉をついに発する。

「汝、諸星大…いや、赤井秀一は宮野明美を本当に愛していること

を誓いますか…?」

(…か。)

「…誓います」

そう言って、彼女のピンク色の唇に誓いのキスをした。

ひらりと一枚の花びらが舞い落ちてきて、左の肩にのった。

『大君…』

ふと、彼女を抱きしめたときの香りを感じた。その花びらを手に取り陽の光にかざす。

「…明美」

思わず、彼女の名前を呼ぶ。

すると呼びかけに答えるようにサァーっと風が抜けていった。

桜舞い散る中の儚い誓いは、儚く散った彼女の命とともに永遠に叶えることができなくなった。

そして桜だけが、今年も花を咲かせる。

春：さくら（後書き）

春夏秋冬の4つの物語、二人が一緒に過ごした3年のうちのどの春夏秋冬かは決まっていませんが、夏から始まって段々と諸星の明美に対する想いが強くなっていくように書けたらいいな～と思っていました。何故か諸星の別の欲求も段々強くなってしまいました…。

「廻る季節に目を閉じて」は今回で最終話です。みなさんお付き合いいただきありがとうございます。

また感想、ご意見いただけたら嬉しいです。

次の連載もすぐに開始予定です。そちらもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9906h/>

廻る季節に目を閉じて

2010年10月10日20時35分発行